

別 離

1

そのころ、私は、彼のことを「先生」と呼んだ。それ以外の名で呼ぶことは、考えられなかった。それでも、友人などと話していて、なんとなく「先生」ということがためらわれ、つい、「さん」づけで呼んでしまったりすることがある。そうすると、私は、次の瞬間から後ろめたい気持になった。「先生」という名以外の言葉で、彼のことを呼ぶのは、そのころの私にとって、許しがたい背徳なのであった。

別離
私が、太宰治の家をはじめて訪ねたのは、昭和十五年十二月のことである。彼は、数え年の三十二歳、そして私は、ちょうど十歳下の二十二歳、後にアッツで戦死した三田循司と同行したのだった。三田は、私の一級上で詩を勉強していた。

いま思うと不思議なほどなにも読めていなかったのだが、私は、その前年の仙台の高等学校時代から、とりつかれたように太宰の作品に熱中するようになっていた。たぶん私が、「自意識過剰」ということに思いなやまされていたからであろう。たとえば、『八十八夜』という作品には、こんなふうに書いてある。

「笠井さんは、そんなに有名な作家では無いけれども、それでも誰か見ている、どこかで見ている。そんな気がして群集の間にはいったときには、煙草の吸いかたからして、少し違うようである。とりわけ、多少でも小説に関心を持っているらしい人たちが、笠井さんの傍にいたときなどは、誰も、笠井さんなんかに注意しているわけではないのに、それでも、まるで標固して、首をねじ曲げるのさえ、やっつである。——もともと笠井さんは、たいへんおどおどした、気の弱い男なのである」

私もまた、どんな小さな動作にも、人にどう見られているか、どう思われているかという意識がつきまとい、ポーズだと思いだすと、身動きができなくなるような気持にとらわれて、いっこうにとりとめがなくなるのであった。

年譜によれば、昭和十四年の八月号の『新潮』だというが、はじめて雑誌でこの作品を読んだ時には、身ぶるいするような感動をおぼえた。読みすすむにしたがって、活字が一つ一つ胸の中にきざまれてゆくような気持だった。自分の気持が、びしゃりと寸分たがわるのであった。

ずここに書いてある、俺の言いたかったのはこれだと、思わずにはいられた。この作品の中で、作者は、「自意識過剰」の姿をえがいているというだけではない、そうした自分を素直に肯定して、そこから少しずつ、一步一步すすみ出ようとしている新鮮さがあるのであった。

その夜、私は、手もとにある限りの雑誌をひっくりかえして、同じ作者の作品をさがした。『懶惰の歌留多』と『姥捨』、そういえば、たしかに前に読んだおぼえがあった。『懶惰の歌留多』は、形式の新鮮さにひかれるものがあったが、もう一つその面白さにわかりにくいところがあり、『姥捨』は、何の感興もなく読みすていたものだ。そこで、興奮のさめぬまま一気に読みかえたのだが、前のときよりは、さすがにいくらかはわかるような気持にはなったものの、『八十八夜』の感動はどうしてもえられず、それがひどくもどかしかった。

次の日、私は、本屋に行って『愛と美について』を買った。それはあまり手にとられず棚のすみの方に残っている本であったが、あれもこの太宰治の作品であった、よしあれを買おうと、『八十八夜』を読みながら考えていたのである。白地の紙の中央に、浮き出したように一輪の花が刷ってある瀟洒な感じの箱に入っている本だった。『愛と美について』には、同名の作品のほか『秋風記』『新樹の言葉』『花燭』『火の鳥』などが収録さ

れている。それぞれに、『八十八夜』とはまた異った新鮮な魅力があつて、私をとらえてはなさなかつた。

それから『女生徒』、大形菊判の表紙の真白な『晩年』、新潮の新選文学叢書の一つで、変形四六判、それまではこの作者はヘンな顔をしているという口絵写真の印象しか持っていないかつた『虚構の彷徨』、まるでうすっぺらな『二十世紀旗手』、これらの本をさがしまわつては読みふけた。その一冊一冊が私をかきまわしたのである。『八十八夜』の感動も、いまでは、それほどではなかつたように思われた。なかには、やはりよく理解できないものもあつたが、これらの作品の多くは、私をゆさぶり、時には感動のあまり有頂天にさえした。

ちようどこの時期は、太宰が美知子夫人と再婚し、新たな思いで次々に『美少女』『畜犬談』『おしゃれ童子』『俗天子』『鷗』『兄たち』『春の盗賊』『駈込み訴へ』などといった作品を発表しはじめた時にあたる。私には、新聞の広告から「太宰治」という活字が浮き上がり、目の中にとびこんでくるような思いがした。なにげなく取り上げた雑誌を、バラバラとめくつて、あ、これは太宰の文章だと思つて、あわてて目次を見てみると、たしかにそうだ。しまいには、ずらりと雑誌のならんだ本屋の棚のまえで、太宰の文章ののっているものは、なんとなくカンでわかるような気さえしていたのである。

『愛と美について』の自序には、「こんな物語を書いて、日頃の荒涼を彩色しているのであるが」とある。だが、私は、その「日頃の荒涼」なるものが具体的にどんなことなのか、少しも知っていたわけではない。それどころか、そんなことが書いてあることに、さして注意をほらいさえしなかつた。そのくせ、私は、太宰治こそ私という人間を誰よりもわかつてくれる人だと信じて疑わないようなところがあつた。たとえばその氣の弱さや、はにかみについて、またそれを糊塗しようとしてお道化ること、そのユーモアについて、そうしたことをすべてをひっくりめ、自分で自分がどうにもいやになることについて、あるいはまた、幼い時から自分の容貌が氣になり『おしゃれ童子』という作品にあるように、耕の着物の下に白いフランネルのシャツを着込み、袖口からいかに純白、純潔のシャツがのぞき出るか腐心するといった、あわれなおしゃれについて、まったく「私」と同じだと思つた。そのころ私は、自分の家の女中に理不尽なことをしてしかもそれが母に知られるということがあり、それはどうかすると私を落ち着かない暗い氣持にさせていたのだが、それも私は、『思ひ出』の中の一節になぞらえてみたりしていたのである。

同じ高等学校の理科の生徒に一人、やはり太宰が好きだというのがいることを、そのうちに知つた。東京の中学出身で、なんとなくデカタンなおいのする男だつた。私などのよく知らない太宰その人のことについても詳しい様子であつた。けれども私は、そんなこ

とを知らば知るほど、彼を反撥し軽蔑しようとした。デカタンだなんて、あいつはただデカタンぶってるだけじゃないか。それに、太宰は、決してデカタンなんかじゃない。彼は、太宰の形骸をまねしているだけだ。その私は、彼のような存在は、太宰を潰すものだと思っていた。

こうして私は、東京の大学に來たわけだが、そのころの日記をみると、「こんな心を征服して、いわば、一種の自意識過剰を征服して、単純素朴に！ここに太宰治論を書かねばならぬ理由がある。」やたらにそんなことが書いてある。

そのころの文学青年のつねで、せっかく東京に出てきたからには、私も、だれか作家のところに行こうと思っていた。行こうというのは、もちろんただ「行く」というだけではない。「弟子入り」するというほどの古風な気持ではなかったにしても、知遇を得たいという期待はかなり強くこめられている、そういう当時の文学青年用語だった。

ところで私は、へんなのだが、それほど打ちこんでいた太宰だけが、行こうと思ひ唯一の対称ではなかった。太宰のところにも行きたいと思っていた。しかし私は、それと同じくらいに『故旧忘れ得べき』や『起承転々』の高見順氏のところにも行ってみたかった。太宰は、私を敬愛させ熱中させるだけ、直接たずねるのがなにかためらわれたのかもしれない。それにくらべると、高見氏の作品の自意識過剰ぶりには庶民のみたいたいところがあ

って、親しめる感じがあったといえる。だが、いずれにしても、私は、それをなかなか実行に移せないでいた。「行く」ための手続き、たとえば、手紙を書くこと、そして、玄関先ではどんなことを言ったらいいのかとか、そういうことを考えだすと次第に気が重くなり、不安な気持になるのだった。

ところが十一月の末、どんなはずみか、まさにはずみとでもいうよりほかしかたがないのだが、夜、本を読んでいてにわかにはずみで、太宰に手紙を書いた。

思ったちは、はずみであっても、気持は真剣だった。この文章一つで、自分というものの姿が見られるのだと思うから、何度も考え書き直したが、結局は「おたずねしたい」ということだけを簡単に書くことになってしまった。そして、息をこらすような思いで返事を待った。

三日目、私の手紙に封入した封筒を使ってようやく返事が来た。その封筒には、私の字で住所姓名を表書きしておいたのだが、私の名前の下の「行」が細字の華麗なペン書きで「様」に直されてある。そして、ななみは便箋一枚に文学を勉強することで、「おたがいにはげましあって」ゆくの歓迎するが、「しかし、好奇心からの作家訪問なら、お断りします」とあった。

人に好奇心からの作家訪問」のように思われたのではないかという思い、それにつれて、自分という人間が卑小な計算ばかりしている醜い男のように思われてきたのだ。たとえば、表書きを自分で書き三銭切手をはった封筒を同封したのも、そうすることで、必ず返事をもらおうという計算がないわけではない。そのいやらしさが、私の下手糞な表書きの字によくあらわれているようだった。それがはっきり見ぬかれていることが、太宰の「様」の字のなかに、いやおうなく出ているようにさえ思える。そして、太宰を高見順とはかりにかけていたという思いもあった。

私は、そのまますぐ太宰に二度目の手紙を書いた。熱にうかさされたようになって、いうならば、わが思いのたけをのべたのである。かなり長い手紙になった。そして私は、その手紙と太宰の手紙とをもって、三田の下宿をたずねた。三田には、最初の手紙を書く時も伝えてあった。私たちは、高等学校以来の友人などといっしょに同人雑誌をつくっていたのだが、その中で、三田は、ただ一人の詩人で、酷烈とでもいうような自分の胸中のきびしいはげしい思いを表現するために、言葉を模索していて、私は、友人として最も三田を敬愛していた。私は、どうしても三田に、この興奮を伝えたかったのだ。

その日、三鷹についたのはたしか午後二時ごろだった。東京府下三鷹村である。新婚の

太宰は、前年の九月、奥さんの実家のある甲府から引越してきたばかりであった。

駅の南口を出て真すぐに下ると、すぐどぶ川にぶつかると、そこを左に折れて、どぶ川沿いにしばらくゆくと、やがて家並がきれて、右も左も陸稲の畑になる、杉や雑木の木立などもみえる。そのまま、塊っぽい道をゆくと、また家がある。「高級住宅」のような家もあるが、いまだいえば都営住宅のような小さな家もところどころにまじっていて、しいんと静かな住宅地だった。そこをこんどは右にまがって、同じく右側の路地に小さな家が三軒ほど並んでいる、そのいちばん奥が、太宰の家であった。駅前の交番でおおよそのところは聞いてきたのだが、なかなかその家は見つからなかった。そして、私も三田もあまり口をきかなかった。なにかしら重い興奮があって、そこらの人に道を聞くこともせず、「こっちなかな」「うん」などと言うだけで、そこら中をぐるぐる歩きまわっていたのである。

生垣の細い路地の奥に、太宰の家はひっそり静まりかえっていた。玄関の左の柱に例の字で太宰治、カッコして津島と書いた表札があった。しかし、声をかけてもしいんとして人の気配がない。隣りから女の人が出てきて留守だという。そこで、やたらにそこらを歩きまわった。ぶらぶら歩きではない。かなりの急ぎ足で歩いた。留守だからといって別がっかりなどはしなかった。帰ろうとも思わなかった。そんなことは思いつきもしなかつ

た。ごく自然に、帰るのを待つために歩きまわっていたのだった。

もう一度たずねたのは、そろそろ夕方近かったのではないか。こんどは留守ではない、人のいる気配がする。さっきの表札をもう一度たしかめるようにしてから、案内を乞うた。玄関のガラス戸をあけると、正面の障子が少しだけ開き、奥さんがややかなめに顔のぞかせて、まず留守にしたわびを言われた。私たちが来たことを、隣家の人からでも聞いたのだろう。

そして、太宰は、その玄関の障子をあげたところの六畳間に、机を前に、あちらを向いて坐っていた。その左手が床の間で、扉つきの小さな本箱が一つおいてあり、佐藤一斎の書という、だが、私にはほとんど読めないくねくねした字の、掛軸がかかっていた。右手のかもいのところ、仏像かなにかの写真の類もあったように思うが、よくおぼえていない。そのほかにはなにもなかった。さっぱりした感じの室であった。

太宰は細かな耕木綿の着物で、こつちをむくなり堅くなっている私たちに、髪を一にぎりにぎりあげるようにしながら、ややあわただしくお辞儀を返した。思っていたよりも、端正で若々しい風貌である。きこちなく固くなっていたのも、まもなくほぐれた。三田は、もともと寡黙であった。大きな眼を、ぎろりとむいて坐っている。私は、会話のとき聞れるのがこわくて、むやみに質問したりしゃべったりした。ずいぶんおろかしいことも聞

いた。たとえば私は、そのころの近衛新体制というものをほんとうに、「新しい」体制をつくりだすことのように信じて、そのことを論じ聞いたりもした。しかし、太宰は、みんなまともなうけとめてまじめに答えてくれた。その答えは、的確で私たちをわくわくさせるような魅力のある新鮮さにみちていた。そして、その夜もたぶん太宰は私たちを外に連れだし、いっぱいやるということになったのだったろうと思う。というのは、太宰は誰に對してもいつもそうだったからだ。しかし、どんなふうにどこに連れてゆかれたのかは、まるで思い出せない。ずうっと、そのまま太宰の部屋の中にいたような気がする。が、ともかくも、私たちは、太宰といっしょにいるという雰囲気の中に酔いしれていた。

太宰も、だんだん私たちに気を許すというところがでてくる。わざとらしく唇をへの字にまげて、自分の作品のよさについて大威張りしてみせる。自分や友人のおかしな失敗譚を聞かせてくれたりもする。さほどでもないような話が、太宰の口から聞くと、妙に人情の機微をうがつものになっていて、おかしくて、おかしくてたまらなかつた。太宰自身もまた、私たちといっしょになって大笑いした。そんなふうになると、太宰の端正な容貌ががらりとかわって、なんともいえずくだけた親しみやすい顔になった。

「満月なり。」

感激の極なり」

と、日記には書いてある。躍るように大きな字である。そのあとにぎっしり、太宰の言葉がメモしてある。何を書いたのか、まるで読めないところもあるが、だいたいはい、こんなことである。

「ロマンチズムは新体制ですよ」

「藤鉄のような木のそばに、スイートピーがある。それがロマンチズム」

「若い君たちのジエネレションを、この太宰がわからなくて誰がわかる」

「新しさ、それは太宰以後の文学」

「知性とは神への触覚知である」

「しかし、無智の強さということもある。怖れ知らぬ人」

「われわれの運動は、第二の白樺運動。しかし、武者小路は鉛の川だ。大きく流れてゆきが底の小石や砂はこすらない。俺は、水の川。くまなくゆきとどく」

「作品の価値は、その中で作家の失ったもの、どれだけ、血を流したかによってきまる」

「自意識過剰でどうどうめぐりとは、怠け者だ」

「純粹ということに死ねたら、純粹の勝利。しかしなかなか死なせてはくれません」

この最後のものだけは、たしか三田の質問に対するものであった。

ちょうどその次の日、『文学界』の昭和十六年正月号が発売された。それには、太宰の『東京八景』が掲載されている。そのころは、東大正門前に有斐閣の小売店があって、学生や教師向きの各種の新刊書を扱っていたが、私は、そこで買って、すぐ近くの森川町の下宿まで帰る間がもてなかった。店頭で取り上げて、読みだしながら代金をはらい、そのまま、休憩室になっていたその二階に上がり、ソファに坐りこんで一氣に読み続けた。『東京八景』は、太宰が昭和五年弘前高等学校を卒業、東大仏文科に入学して上京以来これまでの生きてきた道すじを、つよい簡潔な、そしてどことなくリリカルなものを感ぜさせる文章で書きつづったものであった。太宰の十年間の生活の文学的総括ともいえる。「私はそれを、青春への訣別の辞として、誰にも媚びずに書きたかった」(『東京八景』)と太宰はいう。

太宰がこれまでの生活をつつみかくさず真正面から書いたのは、これがはじめてであった。私は、この作品で、太宰の最初の結婚、そしてその妻の「過失」、麻薬中毒、狂乱、精神病院への入院、非合法運動とそこからの脱走、情死、自殺、「過失」をおかした妻との心中未遂など、太宰の重い過去のいきさつを、はじめてすじ道たてて知ったといっている。これまでに読んだ太宰の作品が、この作品の背景に一つ一つさまざまイメージとなっていてたちこめてゆき、私は、吸いこまれるように読んだ。厳肅な、そのくせどこか甘い切

ないような気持もあって、最後の方の「けれども私は、その時、たじろがなかった。人間のプライドの窮極の立脚点は、あれにも、これにも死ぬほど苦しんだことがあります、と言いつける自覚ではないか」というあたりまでくると、ほとんどしゃくりあげるばかりの状態であった。

その夜、私は『晩年』一冊をあらためてすみからすみまで読みかえし、ねむることができなかつた。

こうして私は、月に二度も三度も太宰をたずねるようになった。いま筑摩書房にいる野原一夫は、私よりいくらか年下だが「二十数年前の昔、三鷹下連雀の野道を、所番地をたずね歩いて一人の高校生がいた。その高校生にとって、太宰治に会うことだけが、その人から何かを聞くことだけが、自分の人生の崩壊を防ぎ得るただ一つの途だと思われていた」(雑誌『太宰治研究』第五号)とその思い出を書いている。また大学で私の一級上の独文科だった堤重久はこう書いている。「私はためらった。嘘をつこうかとちらっと思ったが、やはり出来なかつた。先生にまで嘘を言ったら、この世でほんとのことを言える人は誰もいなくなってしまうと思いなおしたからである」(楡書房『太宰治の肖像』所収)

私の思いもまた、同じようなものであった。

翌年二年生になるとともに、私は強引にたのみこんで荻窪の知人の家の三畳間に下宿をさせてもらうことになった。少しでも三鷹に近づきたかつたのである。

2

多くの人が太宰の「思い出」というと書いていることだが、太宰は夕方になって外に出るのが実に素早かつた。酒を飲みに行くのである。

夕方近くになるとにわかに着かぬ様子になり話の受け答えも上の空になる。そのうち「あ、ちょっと……」と、「出よう」というのを半ば口の中で言ったかと思うともう玄関口の障子のところに掛けてある二重回しのマントをひっかけて、外に出た。時には、「おい、ハンカチ」などと、ひっそりと隣りの部屋で仕事をしている奥さんに言うこともあったが、それにしても、取り残されたわれわれがあわてて奥さんに挨拶をすませ、玄関を出ると、もう太宰の姿は路地になく、路地をまがって道はかなり向こうの方を歩いていて、私たちはこ走りになって追いかける。なにかの都合で、私たちの出てゆくのがおくれると、駒下駄をカタカタならすようなあんばいで、(そのくせ、突につまらなそうな

顔で——)待っていた。そして、道が三鷹へまがるところまでくると、ややゆっくりした歩き方になった。

もっとも三鷹にだけ行くとは限らない。道を反対側に折れて玉川上水の万助橋をわたり、井の頭公園をぬけて吉祥寺に出ることもあった。が、まず行く店はたいいていきまっていた。三鷹なら、駅前にあったすし屋で冬はおでんなどもやる「きくや」、そのもう一つ裏通りの、戦後は最後まで太宰にかかわることになった「千種」附近のうらぶれたカフェー、駅前向って右側では小さな神社のそばの屋台店に毛の生えたような粗末な飲み屋、稲荷小路の、壁の丸窓から奥に出入りする飲み屋、それに吉祥寺寄りの線路をこえて古本屋のところにもう一軒。ここでは、帰りぎわうす暗い畑のところまで二人並んで立小便をしていると、すぐ眼の前にその家がありいきなり雨戸をあけて照らし出され、平あやまりにあやまったこともある。そして吉祥寺では、まず井の頭の池から駅前にまっすぐ出てゆくところにあった茶屋、駅前通りから右にまがったところにあったスタンド、それからその反対側のたしか「だるま」という飲み屋など。後に太宰がよく行くことになった、いうところの「おぼさんの店」「コスモス」は、まだなかった。あつたのかもしれないが、ユースのうちには入っていなかった。もちろん荻窪や新宿、またごくまれには浅草や私たちの誘いで本郷まで足をのぼしたりすることもあったが、太宰の家をたずね、そして連れてゆか

れるのは、こうした店々だった。まだ明るいうちから飲みはじめ、何軒か店をかえ、夜おそくまで飲みまわった。それでも別れがたく、深夜の井の頭公園を、万助橋のあたりまで逆に太宰を「送って」行ったりした。そのころの井の頭は、大きな杉の木立がいまとは比較にならぬほど深く厚く、その暗い道を太宰と二人で歩いてゆくのは、なににもまして満ち足りた思いがした。

三田が戦死した後に書かれた『散華』という作品の中で、太宰はこんなふうに書いている。

「その夜の話題は何であったか。ロマンチズム、新体制、そんな事を戸石君は無邪気に質問したのではなかったかしら。その夜は、おもに私と戸石君と二人で話し合ったような形になって、三田君は傍で、微笑んで聞いていたが、時々かすかに首肯き、その首肯き方が、私の話のたいへん大事な箇所だけを敏感にとらえているようだったので、私は戸石君の方を向いて話をしながら、左側の三田君によけい注意を払っていた。どちらがいいというわけではない。人間には、そのような二つの型があるようだ。二人づれで私のところにやってくる、ひとりは、もっぱら華やかに愚問を連発して私にからかわれても恐悦の態で、そうして私の答弁は上の空で聞き流し、ただひたすら一座を気まずくしないように努力して、それからもうひとりは、少し暗いところに坐って黙って私の言葉に耳を澄まして

いる」「二人づれで来ると、たいていひとりには、みずからすすんで一座の犠牲になるようだ。そうしてその犠牲者は、妙なもので、必ず上座に坐っている。それから、これもきまっていたように、美男子である。そうして、きつとおしゃれである。扇子を袴のうしろに差し、来る人もある。まさか、戸石君は、扇子を袴のうしろに差し、来たりなんかはしなかったけれども、陽気な美男子だった事は、やはり例に漏れなかった。戸石君はいつか、しみじみ私に向かって述べた事がある。／＼「顔が綺麗だって事は、一つの不幸ですね」／＼私は噴き出した。とんでもない人だと思った。「戸石君は、果して心の底から自惚れているのかどうか、それはわからない。少しも自惚れてはいないのだけれども、一座を華やかにする為に、犠牲心を發揮して、道化役を演じてくれたのかも知れない。東北人のユーモアは、ともかく、トンチンカンである」

太宰独特の戯画化された誇張はあるにしても、私は（そして三田も）、だいたいはこんなところだったのだろう。しかし、私には、意識して道化役をかって出ているつもりなどまったくなかった、ましてやそれが一座の「犠牲」とは思ってもみなかった。ごく自然のなりゆきでそういうことになっていったといつてよい。新体制の「愚問」にしても、さきにも書いたように自分では大まじめだったのである。そんなことよりも、太宰にあうとなにか冗談を言いあいたくなる、そんな気持にさせられた。「美男子云々……」についても、

そのころの私が自分の容貌にある種のこだわりを強く持っていたのは事実だが、太宰がどんなに自分の容貌にこだわっていたかは、自分でいくつもの作品に書く通りだ。だから私は、私の容貌をことさらに自慢してみせたり、太宰の容貌をけなしたりして、サカナにせずにはいられたなかったのである。たしかに「トンチンカンな東北人のユーモア」なのであろうが、誰よりも太宰自身がその「ユーモア」の持ち主なのであった。

とにかく太宰は、よく笑った。口にこぶしをあて、少し前ごごみになって、口も目もくしゃくしゃにして大笑いに笑うのである。太宰がそのようにして笑うと、楽しくてたまらなかつた。家の中でも冗談を言いあって笑わなかつたわけではない。しかし太宰と二人だけで坐っていると、ひどく安心な気がする一方、例の自意識過剰が底にあって、こんなことを言つて太宰に嫌われはすまいか、この時間を太宰はつまらない思いでいるのではないかなど、どうかするときこちなくこだわるところがあった。ところが、酒をのみだすと解放感があった。酒のせいだけでは、対座しているのではなく、横に並んで坐っているというの、そんな気分させるのだ。太宰自身にもそういう一種ののびのびする気分があったように思われる。それがなんとなくわかるので、私は、自由になんでもしゃべれるような気持になった。酔がまわると、太宰は、唇をへの字にまげ、やたらに威張つて、ひどく断定的なもの言いになる。つまらないことにも威張る。「酒に酔ったら豆腐を食べば

よい。豆腐を食べ。うむ。(重々しくうなずいてみせて)豆腐を食いながら飲むと絶対に悪酔はしないんだ」本気のような、わざとのような調子である。そのころ太宰の家で引き合わせられて友人になり、急速に親しくなった堤重久などと「太宰さんは、生まれてはじめて弟子ができて、うれしくってしかたがないので、あんなに威張ってみせるんじゃないのかね」などとかげ口をきいて笑いあったりしたが、その太宰の威張るのも楽しいことであった。

太宰は、文学であれ人間の生き方であれ、大げさに身がまえてみせること、深刻なあるいは嚴肅そうなポーズをとってみせることを、極端なまでに憎みきらった。あとではその作品の題名にまでした「微笑もて正義を語れ」というのが彼のいわば旗印であり戒律であった。またマタイ伝第六章「なんじら断食するとき、偽善者のごとく、悲しき面容をすな。かれらは断食することを人に顕あらわさんとて、その顔色を善よふなり」——だから、悲しく苦しいことのあるときに、ことさらにそのような顔をしてみせるのは、にせものだといのである。実際、太宰は、えらい人ただの人誰彼なく、ささいな何気なさそうにみせている言動のなかからも、その「偽善者」的なにせもの性を敏感に見破った。それはしばしば酒のさかなになり、大笑いのたねにされた。そして太宰は威張って訓戒するのである。

「なんじら断食するとき、頭かしらに油をぬり、顔を洗へ」おまえたちも苦惱が深ければ深いほど、髪にちゃんとポマードつけて、無精ひげなどはすってクリームもぬって、いつも明るくほほえんでいなければならぬ。うむ、そういうものなんだ。

だが、それにしても太宰のあの臆病というものは、どういうことだったのだろうか。いっしょに並んで歩いていて、にわかにか口数が少なくなり、私の肩のかけにかくれるような気配になる。と、向こうの方に犬がいる。ずいぶん向こうの方にいるのに、もう、そうするのだった。またあるときは、玉川上水の堤を散歩しながら、木下利玄の例の「牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占めたる位置のたしかさ」という歌の立派さを教えてくれ、彼がついで軍艦がいかに軍艦らしくどっしりしているかを描写にしているかについて「いいか、おまえ『八幡ゆるがず』っていうんだ。どうだ『八幡ゆるがず』なんだ」と、言ったとたんに、太宰は大げさな悲鳴をあげて、私の肩にしがみついた。私もびっくりしてあたりを見まわすと、——次の瞬間思わずゲラゲラ大声あげて笑った。「八幡ゆるがず」どころか、草叢から道に出ている古繩を蛇とまちがえているのである。そんなこともあった。

しかし、いくら大地主の子どもであるにしても、太宰は津軽の田舎育ちであった。たとい犬や蛇が嫌いではあっても、太宰のその様子はどうも大げさすぎたようだ。あるいはかりそめの身ぶりが、くりかえすうちに、ほんものになってしまった、ということもあったのではないかと、思われるのである。だがそのころの私には、その太宰の臆病ぶりも楽し